

開発途上国スタディツアー実施報告

北林春美・福井美穂・駒田千晶

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

Report of Study Tour in Developing Countries

Harumi KITABAYASHI, Miho FUKUI and Chiaki KOMADA

Ochanomizu University Global Collaboration Center

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターは、2010 年度から「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業を実施している。この事業は、開発途上国、特にポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指し、国際連携による大学の教育・研究・社会貢献を目的とするものである。この事業の一環として学生による国際調査（スタディツアー）を実施し、2011 年度から 2014 年度までの 4 年間にのべ 75 名の学部生・大学院生がアジアの国々を訪問した。本稿では、全学共通教育プログラムとして実施したスタディツアーの成果と課題を参加学生の報告書とアンケート結果から分析する。

スタディツアー実施の沿革

学生グループによる開発途上国での体験学習としてのスタディツアーは 2012 年 2 月に第 1 回が実施され、10 名の学部生がセンター教員・スタッフの引率の下で東ティモールを訪問した。参加者は、2011 年 7 月にグローバル協力センターが発足させた「共に生きる」スタディグループのメンバーとして、紛争や災害、貧困など国を超えた問題を学習するセミナー・ワークショップに参加したり、学内外で身近な国際協力活動を行ったりしてきた学生たちであった。カリキュラム化されていないセンター主催行事や学生の自主活動から生まれた問題意識をさらに深めるための活動として、スタディグループ・メンバーから「途上国を訪れてこれまで学んだ現状をこの目で確かめたい」との要望が出され、これを受けてグ

ローバル協力センターが東ティモールでの調査を主催した。（お茶の水女子大学グローバル協力センター 2012a、2012b）

途上国を訪問するスタディツアーは、国際協力や市民交流を実施する団体によって主催されるものと大学など教育機関が主催するものがある（高橋 2008、渡辺 2001）。お茶の水女子大学には、途上国を訪問し現地社会について学ぶことのできる科目として文教育学部グローバル文化学環（以下「グロ文」）で「国際協力実習」が開講されているが、受講可能な学生数に制限があり、また他に選択できる教科が存在しなかったため* 1、国際協力の学習と実践を志す学生から強い要望が寄せられたものと考えられる。東ティモールへのスタディツアーに参加した学生たちからは、「文献や講義からは得られない体験によって視野を広げることができた」と高い評価が寄せられた。

新たな参加希望者の要望に応えるため、2012 年度からは訪問国を増やすことでより多くの学生の参加を可能にするとともに、学内公募によって学部・学年横断的に広く参加者を募り選抜する方法が採用された。2012 年度には 31 名の学生が 3 グループに分かれて、それぞれ東ティモール、フィリピン、ベトナムを訪問した。訪問先は、引率担当のグローバル協力センター教員が研究や国際協力の経験を有する国からアクセスの容易さ、現地受入れ組織の存在、治安状況などを勘案して決定された。

2013 年度からは、事前事後の学習をさらに充実させて、参加学生各自が選定した多様な課題（教育、保育、栄養、衛生、ジェンダーなど）を深く掘り下げた後に現地調査を行い、その結果を報告書にまとめて発表するまでの一連の過程を全学共通科目「国際共生社会論実習」（学部）共生社会論フィールド実習」（大学院）として正規カリキュラムに組み入れた。「国際共

Table1 スタディツアー訪問国と参加学生数 (2011年度 ~2014 年度)

年度	訪問国	参加学生数			
		学部	博士前期	博士後期	合計
2011	東ティモール	10	0	0	10
2012	東ティモール	11	0	0	11
	フィリピン	8	1	0	9
	ベトナム	8	2	1	11
2013	バングラデシュ	9	1	0	10
	ベトナム	9	0	0	9
2014	ネパール	7	0	0	7
	バングラデシュ	8	0	0	8

生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」科目は通年不定期実習科目（2単位）として開講され、約6か月をかけて事前学習・講義、現地調査、報告書作成、成果発表を実施する。2013年度はベトナムとバングラデシュ、2014年度はネパールとバングラデシュの2グループで現地調査を実施した(Table 1)。(お茶の水女子大学グローバル協力センター 2012b、2013、2104a、2014b)

スタディツアーの概要

事前学習

受講者選抜の後に事前学習を8コマ実施した。事前学習のうち2コマは海外渡航に関するオリエンテーションと安全講習に充てられた。オリエンテーションでは、海外渡航前に各自が行うべき手続きや準備のほか、海外での健康・安全対策や異なる文化・宗教の国を訪問する際のマナーについて講義を実施するとともに、外務省や国立感染症研究所のホームページで自ら渡航先の治安情報や感染症の発生状況を調べることが促した。観光旅行や語学留学の経験はあっても初めて途上国を訪れる学生も多いため、自らの健康と安全をまもることが参加者各自の責任であることを強調し、予防接種の必要性や接種場所などの具体的な手段についても指導した。

事前学習は、渡航先ごとにグループに分かれて学生

Table 2 2014 年度現地調査スケジュール

	ネパール	バングラデシュ
1 日目	羽田発 -バンコク着 バンコク発-カトマンズ着 Dr. Narayanによるオリエンテーション	羽田発 -バンコク着 バンコク発-ダッカ着
2 日目	Muhan 保健組合ポリクリニック訪問 Dr. Narayan 講義「ネパールの医療、女性と子どもの現状」 小児科クリニック (Children's Medical Diagnosis Center) 訪問	【BRAC 事業見学 1 日目】 ノンフォーマル教育プログラム（小学校）見学 BRAC 本部「BRAC 事業概要」講義
3 日目	人身取引被害者支援 NGO (Maiti Nepal) 訪問 (Group A) プライマリ・ヘルスケアセンター訪問 (Group B)	【BRAC 事業見学 2 日目】 マイクロファイナンス・プログラム組合集会见学 コミュニティ・エンパワーメント・プログラム集会见学 アイーシャ・アベッド財団見学
4 日目	障害児教育施設 (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children) 訪問	【日系縫製工場見学とインタビュー】
5 日目	プライマリ・ヘルスケアセンター訪問 (Group A) 児童養護施設 ECDC 訪問 (Group B)	【JICA 事業見学 1 日目】 青年海外協力隊員（環境教育）による ごみ処理事業概要説明・懇談 市場見学→リサイクル業者訪問→収集 現場見学→最終処分場見学
6 日目	女性による環境活動 NGO (WEPGO) 訪問 グループ別学習成果発表会	【JICA 事業見学 2 日目】 講義「バングラデシュの開発と日本の ODA」 講義「JICA の障害者支援協力と BMIS の概要」 盲学校 (BMIS) 見学・生徒との交流 グラミンユニクロショップ見学
7 日目	ホテル発 カトマンズ発-バンコク着 バンコク発	ホテル発 ダッカ発-バンコク着 バンコク発
8 日目	成田着	羽田着

Table3 参加学生の所属学部 (2011-2014 年度)

学部・大学院	人数	パーセント
文教育学部 (うちグロ文)	50 (28)	66.7 (37.3)
生活科学部	13	17.3
理学部	7	9.3
博士前期	4	5.3
博士後期	1	1.3
合計	75	100.0

注) 文教育学部生 (グロ文) のうち 3 名は 2 回参加

Table4 参加学生の学年 (2011-2014 年度)

学年	人数	パーセント
学部 1 年	16	21.3
学部 2 年	26	34.7
学部 3 年	17	22.7
学部 4 年	11	14.7
博士前期	4	5.3
博士後期	1	1.3
合計	75	100.0

各自が選択したテーマについて文献で調べた情報を基に議論する抄読会の形式で実施した。2014 年度バングラデシュ訪問グループでは同国の縫製産業の成長と労働問題をテーマにしたドキュメンタリー映画「Garment Girls ～バングラデシュの衣料工場働く若い女性たち」を鑑賞し、ネパール訪問グループでは大学院博士課程に在籍するネパール人留学生に講義を依頼して訪問国の市民の視点から自国の社会・文化を紹介してもらった。また、それぞれの国に長期滞在した経験をもつ経済・社会問題の専門家を学外講師として招き学内公開講座「南アジアの社会・開発と女性」を開催して、バングラデシュの工業化と縫製産業への女性の進出やネパールの人身取引について理解を深めた。

現地調査

約 1 週間の現地調査は、学期中に実施することが困難なため夏季休暇中の 8 月から 9 月の間に実施した。調査スケジュールは、引率教員が現地の協力者・協力機関に依頼して訪問先を手配した (Table2)。ネパールの場合は、協力者である日本留学経験のあるネパール人医師を通じて女性・子ども支援を行う現地 NGO や医療施設・学校の訪問・見学を手配した。バングラデシュの場合は、現地 NGO である BRAC と独立行政法人国際協力機構 (JICA) に活動現場の見学を依頼した。BRAC は世界最大規模の NGO で見学希望者も多いため、Visit BRAC という部署が訪問者の希望に応じたプロジェクトの見学とスタッフの同行・解説を手配してくれる* 2。JICA は、大学所在地域を担当する国内機関 (東京の場合は JICA 東京内の「JICA 地球ひろば」) で海外の ODA 事業の現場訪問要請を受け付けて海外事務所につないでくれる* 3。

事後学習・成果発表

現地調査から帰国後、参加者は各自が選択したテーマのレポートと訪問記録を日本語で作成するとともに、現地で調査プログラムを支援してくれた協力者・組織向けの短い感想文を英語で作成した。帰国報告会では、選択したテーマごとに小グループに分かれてプレゼンテーションを実施した。さらに、毎年 11 月に開催される微音祭 (学園祭) では学外からの訪問者に向けてポスター展示と発表を行った。2014 年度は、「ゼミ発表」のプログラムでグループ発表を行うとともに聴衆からの質問やコメントを受け付けた。一般市民から予想外の質問やコメントをされて回答に窮する場面もあったが、参加者たちは発表と質疑応答をやり抜いたことで自信をつけるとともに率直な意見や励ましに感銘を受けて、更なる学習や実践への意欲を高めた。

参加者

学部・学年

2011 年度から 2014 年度までの 4 年間にスタディツアーに参加した学生はのべ 75 名であったが、の中には異なる年度に 2 回参加した学生が 3 名含まれるので実数としては 72 名である。参加者の所属学部は Table3 のとおりで、文教育学部生が 3 分の 2 を占め、その中でも国際協力や多文化理解を専攻するグロ文所属の学生が 28 名 (37%) であった。

参加学生の学年の分布は Table 4 のとおりで、学部 2 年生が最も多く 1 年生と合わせて半数以上を占めていた。これは、学部専門科目として提供される授業と異なり全学共通科目である「国際協力共生社会論実習」が履修条件として他の授業の受講を義務付けていないため、今後の学習への入門科目の一つとして多

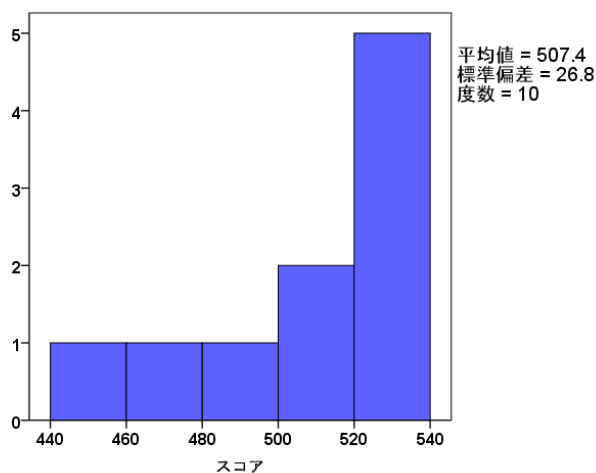


Figure1 参加学生の TOEFL ITP スコアの分布

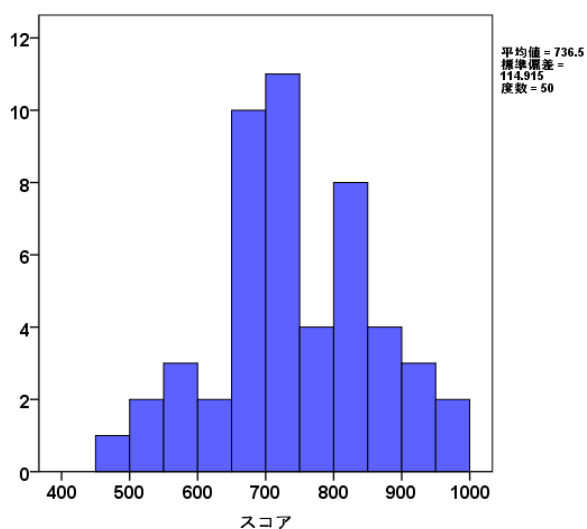


Figure2 参加学生の TOEIC スコアの分布

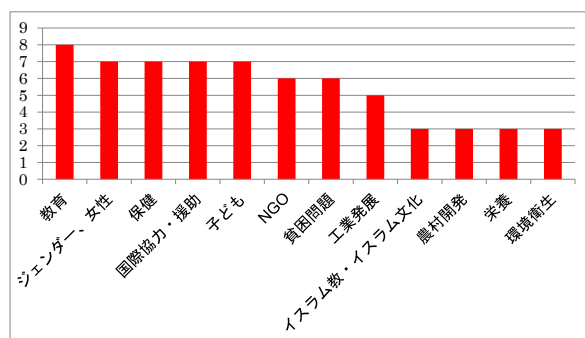


Figure 3 参加学生の関心分野・課題 (2014 年度)

くの学生に選択されていることによると思われる。一方で、個人の研究テーマが絞り込まれている 4 年生や大学院生も参加者全体の約 20% を占め、各自が専攻する分野と関連付けて調査目的を設定している。このように学年も専攻も多様なグループ構成は、教員があらかじめ策定した計画に従って授業・調査を進めることを困難にするが、他方で学生主体の学習テーマ設定や学年を越えた共同作業の実践といった他の授業に

はない方法での学びを可能にしているといえる。

英語資格

現地調査で訪問する国々では、多くの場面で英語によるコミュニケーションが必要とされるため、2012 年度から参加希望者に英語力を示す資格試験結果の提出を求めることとした。その結果 63 名がなんらかの公的な資格・スコアを申告した。その内訳は英検 (22)、TOEIC (50)、TOEFL ITP 学内試験 (10)、TOEFL iBT (1)、IELTS (6) で、26 人が 2 種類の資格を申告していた。英検資格はほとんどが入学前の高校生時代の受験結果で 2 級または準 2 級のレベルであった。2013 年度までは TOEIC スコアを申告したものが多く、2014 年度からは TOEFL ITP のスコアを提出する学生が増加している。これは 2012 年度後半に開始したグローバル人材育成推進業の下で、TOEFL ITP 受験が義務化されたことによるものと考えられる。

参加者の TOEIC、TOEFL ITP スコアの分布は Figure 1、Figure 2 のとおりである。TOEFL のスコアがグローバル人材育成推進事業で設定された達成基準である 550 点 (iBT80 点相当) に達している学生がいないのは、1、2 年生がスコア提出者の大部分 (8 名) を占め本スタディツアーが初めての海外留学経験である学生が多いことによると思われる。これに対して TOEIC のスコアを提出した学生の半数は 3・4 学年と大学院生で、半数の学生が TOEFL550 点に相当する 730 点以上のスコアを提出していた。また、スタディツアーに 2 回参加した学生については、後に参加した際に提出した英語スコアが前回提出時を大きく超える英語力の向上がみられた。

参加の動機・期待

スタディツアーに参加する学生には応募時に平和や開発に関してどんな関心・問題意識をもっているのか、その問題意識に沿って現地調査に何を期待するかを記述することを求めている。申請書に記載された関心領域は多種にわたっているが、「現状を自分の目で見、耳で聴きたい」との希望は共通している (Figure3)。

2014 年度の場合、途上国を支援する NGO の国内のボランティア活動に参加した経験をもつ学生や、途上国支援関連のセミナーや講演会への自主的参加を報告した学生が 15 名中 5 名含まれていた。他に、日本の子どもを支援するボランティア活動を通じて他国の類似事例に関心を持つようになった述べた学生もい

た。特定テーマの研究の一ステップとして現地調査した結果を卒業研究に発展させることを希望する者グローバル文所属の学生に多く見られた。この他に、イスラム教やイスラム文化に直接触れる体験や異文化理解の経験を得ることを参加動機に挙げた参加者も少なくなかった。また、少数ながら「語学力の向上」を参加の動機として記載した学生もいた。(Box 1)

参加前・参加後の留学

スタディツアー参加学生 72 名のうち 12 名は、大学が主催する短期語学留学にも参加した経験があった。このうち 2 名はスタディツアー参加以前に短期語学留学をしていたが、10 名はスタディツアー参加年度以降の留学であった。現地調査中に英語で講義を受け、英語でインタビューを行い、英語でのレポート作成を経験したことによって英語によるコミュニケーションの重要性を痛感したという感想を述べた者が多く、スタディツアーが外国語（英語）能力向上の動機づけとなったという側面が認められる。(Table5)

また、13 名の学部学生が約 1 年間の海外協定校へ交換留学をしているが、すべてスタディツアー参加後の留学である。これについては、1) もともと長期海外留学を希望している学生が、長期留学へのステップの一つとして短期のスタディツアーに参加したこと、2) 国際開発や多文化共生を専攻する学生に留学希望者が多いことが主たる要因と考えられるが、スタディツアーをきっかけに欧米以外の国への留学を選択肢の一つとして検討し始めたという学生もいた。(Table 6)

長期・短期の留学以外に学内で提供される各種のプログラムへの参加も含めると、参加者の 3 分の 1 を超える 25 人がなんらかの海外派遣プログラムに参加していた* 4。この人数には外部団体主催のスタディツアー、ワークキャンプや私費留学を含んでいないため、実際にはより多数のスタディツアー参加学生がそ

Table 5 スタディツアー参加者の短期語学研修先と人数 (2011-2014 年度)

大学名（国名）	人数
オタゴ大学（ニュージーランド）	4
カリフォルニア大学リバーサイド校（米国）	1
トムスク大学（ロシア）	1
マンチェスター大学（英国）	7
合計	13

注）1 名の学生は 2 大学に留学した。

Table 6 スタディツアー参加者の交換留学先と人数 (2011-2014 年度)

大学名（国名）	人数
オタゴ大学（ニュージーランド）	2
国立政治大学（台湾）*	1
タマサート大学（タイ）*	1
ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）	3
マンチェスター大学（英国）	1
モナシュ大学（オーストラリア）	1
梨花女子大学（韓国）*	1
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（英国）	4
ワルシャワ大学（ポーランド）*	1
合計	15

*2 人の学生が 2 大学に半年間ずつ留学した。他は 10 か月～1 年間

の前後に観光以外の目的で海外を訪問しているものと推測される。

参加者の満足度・インパクト

成果・満足度

2014 年度現地調査実施後のアンケートでは、15 名中 13 名が目標達成度について「非常に満足した」、2 名が「満足した」と回答し、参加者の満足度は高かった。その理由については、文献や映像でしか知らなかった現地の人びとと触れ合い交流することによって途上国の生活を「実感」し、これまで想像しなかった

Box 1 学生がスタディツアーに期待すること (2014 年度)

- ・概念や実例を教室で学ぶだけでなく、現実の状況を自分の目で確かめる。
- ・途上国の状況や問題点を実際に自分の目で見て知り考え改善点を発見したい。
- ・現地に住む人々の生の声を聴き、どのような価値観を持ち、何を必要としているかを知る。
- ・被開発支援者・開発支援者の両方の視点から開発の実情や問題点を知る。
- ・実際に自分の目でイスラム圏の生活・文化を見聞する。
- ・バングラデシュを心理的距離が近い国として感じる。
- ・日本に応用可能なネパールの取り組み、ネパールに応用可能な日本の取り組みを見つけ出す。

- ・ 現地の問題を自分の身近に感じられた。
- ・ 実践として英語でコミュニケーションをとることができた。
- ・ 訪問先で大量に質問でき、気になっていたことをほぼすべて納得できた。
- ・ 現地に来て初めて気づくことや発見の連続で新たなものの見方を得られた。
- ・ 現地の状況に関するイメージが変わった。
- ・ 途上国支援の難しさを身をもって学ぶことができた。
- ・ 文献の批判的講読とは異なり活動の熱気にふれることで新たな視点を得た。
- ・ 新たな学問的関心領域が広がった。

「気づき」や「発見」をし、「視野を広げ」、訪問国をより「身近に」感じることができるようになったという感想が多かった。

停電や断水、劣悪な道路事情に直面してカルチャーショックを感じながらも「最貧国」という言葉から想像していたものとは異なる活気や人々の積極性に触れて、これまで抱いていたイメージの偏りに気づいたという感想も多かった。現地 NGO で児童福祉に情熱を傾ける女性リーダーの生き方に感銘を受け、明るく自分たちを迎え入れてくれる地域の女性や子供たちと「顔の見える」交流をすることで多数の学生が訪問国に対して「共感を伴う知識」を持つに至ったことは本プログラムの成果として特筆すべきことである (Box 2)。

同時に、これまで当たり前を送ってきた自らの生活を相対化し距離をおいて見たり、日本社会の長所や短所について客観的に考がえるきっかけになったという感想もあった。

考察

グローバル協力センターが過去 4 年間にわたって実施してきたスタディツアーは、学生が開発途上国に赴き、現地の社会と人々の実情を直接体験することで学内の講義や講読からは得られない「共感を伴う知識」の獲得を可能にした点で他に例の少ないグローバル人材育成のための早期体験学習 (early exposure) 実践といえる。スタディツアーに参加後により深い学習・研究を目指して長期海外留学や関連専攻分野の大学院に進学した者は少なくない。また、学内外での国際協力活動を継続し、訪問した国との繋がりを維持して行こうとするグループも現れた* 5。スタディツアーの参加がすべての留学・進学や実践をもたらしたとは言えないが、海外での学習や実践への心理的なハードルを下げるるとともに、海外で活動するために必要な学習

の方向性を明らかにする上でスタディツアー参加が相応の効果をもっていたと考えられる。

一方で、初めての途上国体験として短期間の見学と交流を中心にスケジュールを組まざるを得ないため、1 か所に長期間滞在して現地の社会を深く理解したり国際協力実践活動に参加したりすることは現スタディツアーの枠内では困難である。また、航空便の手配や現地訪問先との交渉などの実践的作業への学生の参加をどこまで拡大できるかという課題もある。可能であればスタディツアーで得た経験・知識を発展させる人材育成の次の段階として、途上国でのインターンシップや研究のプログラムなど参加者の自主的取組を支援する機会を提供・充実することが望ましい。

注

- 1) 文教育学部グローバル文化学環「国際協力実習 II」において隔年でタイ実習が行われているが、受講希望者が多いため他学部生の受講は限られる。
- 2) BRAC ホームページ Visit BRAC 参照 <http://www.brac.net/content/visit-brac> (2015 年 2 月 3 日閲覧)
- 3) JICA ホームページ「よくある質問：海外の事業現場を訪問したい」参照 http://www.jica.go.jp/faq/09_01.html (2015 年 1 月 30 日閲覧)
- 4) アジア工科大学ワークショップ、グロ文国際協力実習、協定校サマープログラム、KAKEHASHI プログラム等が含まれる。
- 5) 2011 年度と 2012 年度に東ティモールを訪問した学生の有志は、東ティモールの貧困地域を支援する学生 NPO のメンバーとして国内の活動を継続し現地を訪問している。

参考文献

お茶の水女子大学グローバル協力センター (2012a) 「グ

- ローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－：平成 23（2011）年度 実施報告書」
- お茶の水女子大学グローバル協力センター（2012b）「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－：平成 23（2011）年度 実施報告書：『共に生きる』スタディグループ東ティモール国際調査報告書」
- お茶の水女子大学グローバル協力センター（2013）「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－：平成 24（2012）年度 実施報告書」
- お茶の水女子大学グローバル協力センター（2014a）「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－：平成 25（2013）年度 実施報告書」
- お茶の水女子大学グローバル協力センター（2014b）「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－：平成 26（2014）年度 実施報告書」
- 高橋優子（2008）スタディツアーの教育的意義と課題－JICA カンボジア事務所での経験に基づいて－、『筑波学院大学紀要』第 3 集 149-158
- 渡辺恵（2001）「国際協力市民組織（NGO）における人材育成に関する事例研究－NGO スタディ・ツアー参加者の学習プロセスの分析－」、『教育学研究集録』第 25 集 11-21

2015 年 2 月 5 日 受稿